



# 鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第32号

2008年3月7日

## 社叢インストラクター資格認定試験を実施

3月9日(日)に伏見稲荷大社で

第1回社叢インストラクター資格認定試験が3月9日(日)に伏見稲荷大社で実施される。今回、受験資格があるのは、第1回・第2回社叢インストラクター養成セミナーを受講し、全過程を修了した者で、今回はそのうちの5名が資格取得に挑戦する。

社叢インストラクター養成セミナーは、社叢の森林生態学や動物学など自然科学系の講義に加えて、社叢の歴史的意義などを学ぶ人文系の講義や、実際に社叢管理に携わる人々の話を聞く座学と、社叢に入っの毎木調査や生態調査方法の習得、特徴的な社叢の見学などの実習など、それぞれの分野で日本を代表する学者が担当するとあって、非常に密度の濃い内容になっている。

受験資格は、この講座を修了し、さらに1～2年の実地経験を有する者に与えられ、受験者は、事前に提示された2題から選択した1題について、1時間で2,000字程度を記述する論文試験、植生や動物、地質、歴史学等の基礎知識を問う短答式筆記試験、筆記試験の解答を踏まえ、実技を含め、社叢に関する問題点、管理方法等を聞く口頭試問に取り組む。なお、出題の概要は次号に掲載の予定。

試験終了後、直ちに社叢インストラクター資格制度認定委員会において合否判定原案を作成、3月22日に開催される第20回理事会に諮問し、資格を認定する。資格を認定された受験者には年次総会で理事長より認定証が手渡されることになっている。

## 年次総会の概要

◆日時：2008年6月7日(土) 10:00～19:00 於：出雲大社社務所研修室

◆スケジュール：10:00～12:30 年次総会・研究発表会  
13:30～17:00 シンポジウム

入場無料

基調講演：上田正昭・社叢学会理事長(京都大学名誉教授)

パネリスト：上田篤・社叢学会副理事長(京都精華大学名誉教授)など  
17:30～19:00 懇親会(要参加費：1人=3,500円・送迎バス代込)

※ 大会翌日の8日(日)には、日御碕や上田理事長が名誉館長を務める島根県立古代出雲歴史博物館などの見学を計画しています(有料)

## ★★★ 研究発表者募集中! ★★★

\*テーマ：社叢に関する理論的研究、社叢の保存・拡充に関する実践的調査研究

\*発表時間：20分(報告15分+討論5分)

\*応募締切：2008年3月末日必着

\*応募方法：住所・氏名を明記の上、発表内容を300字～400字にまとめて事務局(京都)に送付



## 社叢林の種多様性に及ぼす小面積化の影響

話題提供：石田 弘明（兵庫県立人と自然の博物館）  
 コーディネータ：前迫 ゆり（大阪産業大学人間環境学部教授）  
 コーディネータ：武田 義明（神戸大学教授・社叢学会理事）

日本の森で最も多いのは照葉樹林で、社叢がその大部分を占める。照葉樹林はヤブツバキなど表面がてかてかした葉の樹木で構成され、中国南部が分布の中心で日本が北東限になる。もこもことした樹林で、降雨量年間1,500~4,000<sup>mm</sup>、気温10数℃~20数℃の地域でみられ、沖縄・九州・四国・和歌山・静岡は概ね照葉樹林である。これに対し、東北地方ではブナなどの夏緑林となり、亜寒帯である北海道ではオオシラビソに代表される針葉樹林となる。照葉樹林は葉が生い茂るため林内は暗く、着生植物や腐生植物が多く見られるのもその特徴である。

**伐採にさらされてきた照葉樹林** 1万年前の、最後の氷河期後の温暖化によって照葉樹林の拡大が始まった。漁労・狩猟生活と焼き畑農業を営んだ縄文時代に森林伐採が始まっているが、伐採技術が低く、大規模な伐採はなかった。しかし弥生時代になると水田稲作が始まり、これに伴う人口の増加により伐採が本格化した。古墳時代には鉄器の導入によって大木の伐採が可能になり、また、たたら製鉄には大量の薪を必要とするため、さらに森林伐採が進んだ。時代が下って江戸時代には、新田開発のための大規模な森林伐採、戦時中には燃料とするための伐採、戦後になるとスギやヒノキの植林と、常に伐採にさらされており、現在残る照葉樹林は3000年前の0.06%に過ぎず、そのほとんどが社叢林である。つまり、社叢がなくなれば照葉樹林がなくなるということで、社叢を守る事が非常に重要になっている。

**問題となる孤立化・小面積化** 社叢が残ってきたのは、森が神、神の宿るところであるというアニミズム的宗教観・自然観によると思われるが、必ずしも厳重に守られてきたわけではない。平安期以来の伐採や江戸時代の神社の統廃合、さらに明治の合祀と戦後には政教分離による経営破たんによって拝殿・鳥居の修復のために森の木を処分するなど、常に存続の危機に晒されてきた。中でも昨今問題となっているのは孤立化で、周囲が田畑や市街地に囲まれ、1h以下、ほとんどが2,000~3,000<sup>m</sup>と小面積化している。こうした樹林にある植物も危機にさらされており、レッドデータブックに記載されている照葉樹林の植物のうち、既に絶滅したものが1、(ごく)近い将来に野生絶滅の危険性が(極めて)高い種が215、絶滅の危険が増大している種が92となっている。

**孤立化・小面積化の影響** こうした状況の下で、人為かく乱がどのような影響を与えるのか、特に孤立化・小面積化の影響について取り組むことにした。

まず、社叢にはどれくらいの植物があり、面積による変化はどうかについて調べた。宮崎県中部(高温多雨)、対馬南部、兵庫県南東部(少雨:1,500m以下)、京都北部に調査地を設定し、樹林全体に対する種の多様性を調査した。特に注目したのは照葉樹林に起

因する植物の種数と面積の関係で、フロラ、樹林面積、地形を調査した結果、面積と種数には高い相関関係が認められた。また、同面積で種数を比較したところ、気温との高い相関関係も認められた。

個々の種の分布と面積の関係を調べたところ、大面積にしかでてこないものが33種あり、52%は狭くなる出てこなくなることがわかったが、一方でタブやヤブツバキなど面積に関わりなく出てくるものも38種認められた。欠落する種として特筆されるのは着生植物とシダであった。

さて、照葉樹林の植物がどんな立地を好むのかという点について神戸市西区の大山寺尾根斜面で調査をしたところ、適湿地に遍在する植物は面積縮小によってなくなっていきやすいということがわかった。これは、孤立化・小面積化によって風・光が入りやすくなり、林縁が乾燥しがちになるということを意味している。面積が大きければ内部に湿ったところが残り、多様な環境が保たれるが、面積が少さくなると、林縁の割合が大きくなり、全体が乾燥しがちになるということだ。さらに、小面積化すると個体数の維持も困難になる。大面積の場合、天変地異で失われても回復可能だが、小面積では回復できないのではないかと思われるが、今のところ、それを裏付ける証拠はない。照葉原生林は一般に大面積で種数が多いが、社叢は小面積化が進んでおり、人為かく乱による負の影響によって多様性が下がるなど、危機的状況にあるといっても過言ではない。

**社叢は里山ではない** 昨今、里山に関心が高まっているが、社叢と里山は全く違うものであるにもかかわらず、社叢管理と里山管理を混同し、下刈りや伐採が増えているのは大きな問題だ。社叢には伐採・下刈りに弱いものが多く、取り返しのつかないことになっている例もある。ただ、ツル植物の繁茂やタケの侵入も、放置して置けばよいということではなく、適正な管理で守らねばならないのは言うまでもない。さらに盗掘も増加しており、特にラン科植物が狙われている。こうした人為に加えて、台風・強風などの自然災害による大木の倒壊などの影響も大きい。原生林は大面積なので、かく乱によって若返るという自然のプロセスが有効に働くが、面積の小さい社叢にとっては致命的で、全体が崩壊するということになりかねない。またシカの食害も深刻で、実生など下層植物を食べてしまうため、後継樹がなくなり、森が更新できなくなってしまうし、雨で土が流れてしまうという事態も引き起こしている。

社叢の適正な保護のためには、立ち入り制限、野生動物の管理、ツル植物やタケの伐採、教育・学習の推進が必要であろう。そのためには隣接樹林の保護も必要で、セットで守るという考え方を持たねばならないだろう。



## 東京臨海部の森づくり

講師：樋渡 達也（文化財指定庭園保護協議会会長）  
コメンター：坂本 新太郎（社叢学会理事）

東京臨海部は地形の性質上多くの問題や制約を抱えつつ、江戸時代より現在に至るまで埋立てにより陸地をひろげてきた現在進行形の大都市である。近世の江戸は、庭園を持つ武家屋敷が多数あり、水辺の庭園のような美しい都市であった。また埋立てにより海岸線が沖合いに進み、海辺にあった神社は結果として海との関係を断たれることとなった。江戸の頃と比べると社叢景観は変化しているが現在も都市緑地の大切な役割を担っている。

明治以降、外国貿易港の建設や関東大震災の経験、戦後の都市域の拡大等により、ゴミ処理場としての埋立て地の拡大速度は急激に速まり、埋め立てられた広大な土地の利用について、高度経済成長期に様々な問題が一挙に顕在化した。大気汚染、水質汚濁など公害問題を経験するなかで、この時代の住民たちの生活環境保全意識が急速に高まり、埋立て地の跡地利用に関しても、緑地公園設置の要望が非常に強くなっていった。特にゴミ処理場であった埋立地の最悪の環境条件の解決策として、埋立地の緑化や森づくりの必要性が行政の側にも強く意識されるようになっていった。

昭和46年(1971)の“海上公園構想”(地域住民と共に海の自然保護と利用の両立を図る)は、昭和52年(1977)の“新しい臨海部形成方針”に引き継がれ、埋立て地の土地利用は都市物流サービス用地、都市交通体系改善用地、都市再開発・都市施設用地、自然の回復・新しい街づくり用地に区分化された。

しかしバブル経済の崩壊により緑地計画・森の計画は縮小を余儀なくされ、現在では東京都の臨海副都心計画(442haの土地に4万7千人が住み、9万人が働く副都心を2015年に完成予定)だけが施策として残っている。平成14年(2002)には都市再生緊急整備地域が決定され、東京湾臨海部における防災拠点(大規模防災公園)の整備と大都市圏におけるゴミゼロ型都市への再構築が示された。続いて大都市圏における国際港湾の

機能強化が決定され、さらに「東京港中央防波堤内側に大規模な森を整備する」と明言された。

平成18年の改定計画では、“水と緑のネットワークによる環境と共生するみなとづくり”と“海の森(仮称)計画”が明示された。この計画に基づき緑地のネットワーク形成が図られるようになり、それぞれの緑地の特性に相応しい技術・手法等を用い、臨海部という特殊な環境上の問題に対処しつつ進められてきた。同時にこれらの樹林・森づくりを「環境教育の場」とする事が地域住民らの強い要望であった。

同年(平成18年)東京都は「10年後の東京」を発表し、「川と緑で東京を包み込む」、「自然と共生するみなとづくり」を施策テーマとした。これらの計画では、ヒートアイランド現象への対策として、海の冷風を内陸のビル街へと導く風の道構想を発表した。このような急速な環境問題への施策の転換に対する早急な対応戦略が必要となってきた。

“海の森づくり”は既に事業段階に移っており、約88ヘクタールの敷地に約30年間かけて行う予定で、森づくりに関しては自然環境の再生、活気ある個性的な公園づくり、新しい事業手法の展開が、公園づくりに関してはリサイクルから進める、自然環境を学ぶ、ランドマークを形成する、段階的整備といった指針が掲げられている。また皇居にある武蔵野の樹木の母樹の遺伝子を遷し保存することも検討されている。

このように東京臨海部の森づくりには、虫瞰図的発想の森づくりと鳥瞰図的発想の森づくりを並行し、グローバルかつローカルな計画風土(プランニング・カルチャー)を考慮しつつ森づくりを進める必要がある。その為には、日々直面する現実の問題に最先端技術をいかに駆使するかという工夫と同時に最前線技術を如何に生かして問題解決を図るかという次元の違う2つの方向性が必要とされている。

文責：佐々木百合子

### 次回予告【第30回関東定例研究会】

- ◆日 時：4月26日(土) 13:00~17:00
- ◆場 所：鎌倉鶴岡八幡宮(鎌倉市雪ノ下2-1-31) JR鎌倉駅東口より徒歩10分
- ◆テーマ：鶴岡八幡宮の社叢と古都保存の現在
  - 12:30~ 受付開始(集合場所:鶴岡八幡宮舞殿横無料休憩所1階)
  - 13:00~ 正式参拝
  - 13:30~15:30 講話、映像等(鶴岡文庫にて)
  - 15:30~17:00 境内視察

※八幡宮のご好意で、平成の大改修成った御社殿をはじめ特別に見学をさせていただきますので、この貴重な機会を逃さず振ってご参加下さい。

book book book book book book

庭と日本人

上田 篤 著

「…寺は仏さまを拝むところではないか？ それなのにみんな仏さまを拝まないで庭ばかり見ている、この寒い日に。日本人はよっぽど庭が好きか？」。アメリカ人の友人のこの疑問に答えた「講義録」が1冊の本になったという趣向。

「なぜこれほど京都の庭に惹かれるのか——」というオビのキャッチ・コピーと共に、なかなか心憎いイントロダクションに続き、縄文人の「太陽信仰」に始まり、神社の白砂の謎解き、神泉と曲水、ハスの咲く宝池、枯山水と信仰と庭の関係を解き明かしていく。その道筋は必然的に日本の庭園史と重なり、露地、借景垣、回遊路、前栽と続く。こうして、時代は変われども日本人は「家と庭」を「聖なる空間」だと意識し、信仰と不可分に結びつけてきたと、見事な謎解きを展開する。そして最後には、そうはいっても実際に暮らさざるを得ないのは庭などと望むべくもない、せいぜい物干し場と化したバルコニーしかない現代人を、「庭はかならずしもスペースの問題ではない」と大いに勇気づけてくれる。

取り上げられた庭を見る目は専門家のそれで、建築家としての専門知識に加えて、この社叢学会設立の声を上げたほどの社叢および神社とそれに関わる日本人の信仰への深い考察に裏打ちされたもの。庭園史と同時に日本人の精神史を一読したような気になる。この1冊に導かれつつ、それぞれの庭を実際に訪ねると、今まで見えなかったものが見えてくるような気がする。春の日差しに誘われて庭めぐりをしてみようか。

新潮新書・680円（税別）

## 事務局から

- 年次総会は別記のとおりです。例年通り研究発表者を募集しております。奮ってご応募下さい。出雲は神話のふるさと、多数のご参加をお待ちいたしております。
- 会誌『社叢研究』第6号を同封いたしました。いずれも会員諸氏の力作ぞろいです。ご一読の上、ご感想などお聞かせ頂ければ幸いです。
- 社叢学会への入会案内パンフレットを同封いたしました。ご友人など、ぜひご入会をお誘いいただきたくぞんじます。より活発な活動を展開するためにも、また、関係諸機関への意見陳述・要望などのためにも会員数の増強が欠かせません。ご協力賜りますよう、よろしくお願いいたします。

## 編集後記

いつまでもさぶいなあ。。。でも、お水取りも始まったしなあ、春はもう間近！ と思いつつ、最近では“春を呼ぶお水取り”とか、“暑さ寒さも彼岸まで”なんて言葉が“ウソばっか！”になりがち。温暖化のせいかなあ。。。さすがにシベリアの永久凍土が溶け出してマンモスの死骸が露出してきたなんていう映像を見ると、やばいんじゃないと思う。で、暖房をちょっと節約。蓄熱充電式湯たんぽを手に入れて（1回充電すると6時間使えて電気代は2円！）ひざ掛けと併用でおこた（炬燵です。関西ではいろんなものに「お」ついて、最初の2文字だけになりマス。おざぶ（＝座布団）とか。でも、おふと（＝布団）とは言はないなあ）にしたり、手温めマフにしたり。涙ぐましい。。。学会会計厳しき折から、電気代の節約にもなりマス。どうだ、この努力！（藤岡 郁）

## 次回予告【第30回関西定例研究会】

- ◆日 時：2008年3月22日(土) 13:30～15:30
- ◆場 所：伏見稻荷大社儀式殿（京都市伏見区藪之内町68 Tel.075-641-7331）
- ◆テーマ：沖縄の聖地・御嶽（ウタキ）をめぐる
- ◆講 師：グヴェンドリン・ファンデルフォルスト ※ 講演は日本語で行います（皇學館大學大学院文学研究科神道学専攻）
- ◆MC： 蘭田 稔（社叢学会副理事長・京都大学人名誉教授）

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115 京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号  
TEL 075-212-2973 FAX 075-212-2916  
URL <http://www2.odn.ne.jp/shasou/> E-Mail [shasou@ams.odn.ne.jp](mailto:shasou@ams.odn.ne.jp)  
社叢学会関東支部 〒141-0031 東京都品川区西五反田2-10-8-415  
TEL 03-5875-8423 FAX 03-5875-8321 E-Mail [shasou@macrovision.co.jp](mailto:shasou@macrovision.co.jp)